

# 島崎貞治さん

1924(大正13)年4月15日生まれ

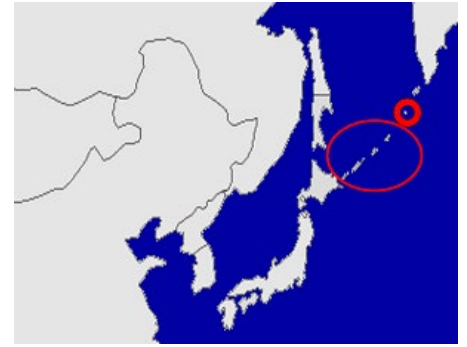
当時の本籍地 東京都

陸軍 整備兵

東京陸軍航空学校

飛行第32戦隊など

戦地 満州、千島列島、ルソン島など



## ●1941(昭和16)年4月10日 東京陸軍航空学校に入校(陸軍少年飛行兵・第12期)

・14歳ごろ立川の航空技術廠を見学した時に、案内してくれた大佐に受験を勧められた。

・その時は今と違ってまさか死んでしまうとは夢にも考えていなかった。10年も航空技術を覚えたら立川の会社へでも入ってやろうかなんて思っていた。入校後半年して太平洋戦争が始まってしまった。父親は随分心配した。

・第6中隊第4班24人のうち12人が戦死した。私の寝台の前にいた宇田富福は重爆撃機の特攻要員になった。

## ●1942(昭和17)年4月1日 所沢陸軍航空整備学校に入校

・操縦ははじめから希望しなかった。だいたい高いところがだめだった。所沢の整備学校ならなんとか俺にも務まるんじゃないかと思っていた。

・整備学校でいよいよ本物の飛行機のエンジンの分解など実技が始まった。最初は二枚羽の飛行機から。

## ●1943(昭和18)年11月 満州・杏樹の飛行第32戦隊に配属

・戦車や砲兵陣地など地上を専門に狙う襲撃機の、部隊だった。

・満州では飛行機の整備をした。毎日演習が9時から始まる。8時30分に整備完了。

・燃料補給、弾薬補給、それから通信機、ぜんぶ点検して異常があれば専門の部署へ報告する。エンジン関係は全部ネジのゆるみ、プラグを点検する。12気筒のエンジンには24個の点火プラグがあった。点火プラグは10時間とか20時間飛ぶと全部はずして点検し、悪いやつは部品があれば交換して、なければ自分で掃除した。部品が倉庫に山とあるアメリカの兵隊とは違った。

・分遣隊は本隊から離れて特別任務につく。たとえば飛行場の爆弾投下の、たいした部落もないこの地点へ行って、一週間、天幕を張って、布板といって10メートル、20メートルの印を草原のところへ釘で打って待つ。演習が終了するとその次の日に機材を撤収した。その時には満州の現地人を連れていく。心細いったらありやしない。

## ●1944(昭和19)年3月1日 北海道の計根別(けねべつ)へ

・部隊は輸送船の護衛任務に就く。

## ●1944(昭和19)年4月18日 千島列島の松輪島(まつわとう)に

## ●1944(昭和19)年6月13日 米軍が松輪島を艦砲射撃

・突然何の前触れもなく、空が真っ白になった。と同時にぴかっと光った。そうしたらいきなり山のほうで鳴りはじめて、だだだだだ。2時間続いた。「明け方には奴ら上陸すんなあ」と思った。

・天幕に以前もらった甘納豆を取りに行った。「あれ食ってから死なねえと死にきれねえ」。

・近くで空気の裂くような音がしたと思った。翌日みたら、電柱みたいな不発弾が50メートル先に落ちていた。

## ●1944(昭和19)年6月24日 千島列島の占守島に移動

・占守島の飛行場は海軍と一緒にだった。海軍のご飯を食べさせてもらった。銀飯なんか何か月ぶり、陸軍は麦飯。



●1944(昭和19)年11月 戦隊にフィリピンへ派遣下令

●1944(昭和19)年12月末 ルソン島カロカン飛行場(マニラ近郊)へ  
・部隊はミンドロ島サンホセ飛行場を攻撃した。二週間の攻撃でほとんど戦隊の主力、幹部が戦死した。

・10機でかけると3機か4機は帰ってこなかった。

・飢えに苦しむ。外米と岩塩で食べた。

・マラリアになった。終戦になってからよくてた。突然食欲がなくなって39度くらいの熱が出る。毎年秋になるとぞくぞくと寒くなってきた。

●1945(昭和20)年1月9日 米軍ルソン島に上陸、北部のエチアゲ、ツゲガラオに移動

・トラックのボロが4、5台あって、それに分乗した。

・途中の川に木橋があった。私が通った日までは橋がかかっていたが、その晩にゲリラにやられたか空襲でやられたか橋がなくなってしまった。後続部隊の人は現地人の船を借りてわたったが、定員オーバーで真ん中までいったら転覆してしまい、全員行方不明になって一人も死体が上がらなかったらしい。

・偉い人はみんな搭乗員と帰ってしまった。

●1945(昭和20)年2月4日 ルソン島ツゲガラオ飛行場から飛行機で台湾へ脱出

・3日の晩に同期生の末木が搭乗を命ぜられた。「いよいよおれも明日の朝出るようになったから」。ほんとに顔色がなかった。もう血の気が全部ひいてて、そんでこんな小さい荷物を、「徳島の実家へ送ってくれ」と頼まれてびっくりした。

・3日の9時頃だろう、「軍命令で32戦隊は攻撃を中止して、台湾へ新機種改変のため撤収すべし」と命令が出た。

・海面を這うように、いつやられるかわからない。でも台湾が見えた時、「俺も助かんのかな」と思った。

・台湾に着陸した直後に米軍戦闘機の攻撃を受けた。

・なぜ整備員が帰れたのかはわからない。戦隊長の岡村少佐が兵隊を大事にしてくれたおかげだと思っている。

●1945(昭和20)年3月28日、計根別へ帰還

・八雲飛行場などによく出張にいった

・終戦前に情報の係の兵隊からポツダム宣言のことを聞いて知っていた。

●1945(昭和20)年8月12日 部隊葬が行われる。今日明日に樺太への出動命令が出るようになっていた

・上陸用舟艇の攻撃をするということで爆弾は小型にきりかえるよう命令があった。

●1945(昭和20)年8月13日 米艦載機の空襲

・ロケット弾で攻撃された。召集の兵隊さんと一緒に逃げて、爆発する直前にくぼみに落ちてあたりが真っ白に。

●1945(昭和20)年8月15日 終戦

・整列してラジオを聞いたが聞こえない。ガーガーガー。

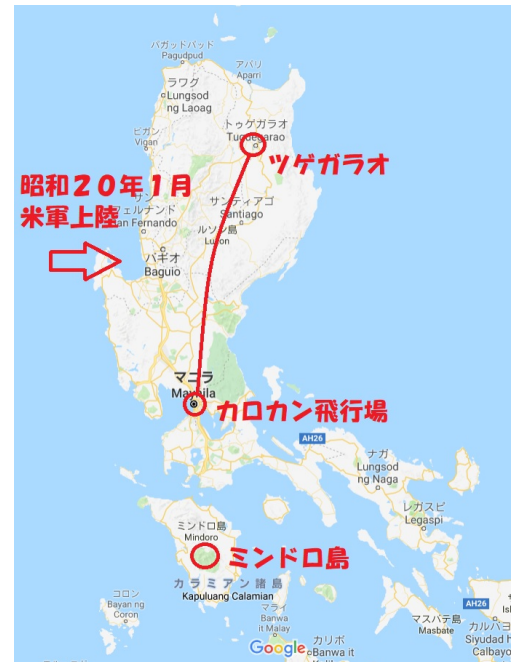
・飛行場を作る朝鮮の人夫の飯場では宴会がはじまった。朝鮮のまかないの人に饅頭をもらった。

●1945(昭和20)年9月10日 復員。自宅へ帰る

・ソ連に抑留されることが一番こわかった。うちの部隊も樺太にいく予定だった。内地に早く帰りたかった。

・青函連絡船でアメリカ海軍の巡検があると聞いた。私物は一切持たないほうがいい、下手をすると捕まるぞと言われたので、もったいないことに写真帳から軍隊手帳から軍隊に関する私物をみんな焼いてしまった。

・私は少年飛行兵の他に大学もなにも出てないけど、あの中で男を磨いたなということだけは皆さんに言っておきたいと思う。ほかは何もないけれども、その時に教わった通り生きてきた。生きるだけで精一杯、これ以上やりようがないほど精いっぱいやった。



(取材日:2018年8月6日)